

七里ヶ丘こども若者支援研究所 叢書 その1

いじめを生み出す学校教育の問題点と改善を巡る小論

ユウキだし ガッコウやすも



笑顔で生きるみらいへ

2012年 秋

滝田 衛 七里ヶ丘こども若者支援研究所 主宰
NPO 法人アンガージュマン・よこすか理事(臨床発達心理士)

【補論 2014年2月23日 篠原宏明氏の講演会を前に】

僕は七里が丘こども若者支援研究所を始める時、この「いじめを生み出す学校教育の問題点と改善を巡る小論」をまず書いた。昨年7月だった。長年、不登校や社会的ひきこもりのこども若者と歩んできた経験から、いじめ問題と常に背中合わせにいるこども若者の実態を振り返らずにはいられなかった。

今回の講演会の動機、それは3年前の篠原真矢さんの自死、中3生だった。その時、僕は神奈川県教育委員会学校フリースクール等連携協議会で話した遠い記憶がある。また昨年5月上記協議会会長職を去る時に、いじめ問題に言及した挨拶をした。なぜならば、大津(2011年10月11日)そして大阪(2012年12月22日)での中高校生の自死は、背景にいじめ・体罰事件があり学校や関係者の不誠実な対応が遅まきながら分かってきたからだ。未来を生きるこども若者が、自らの手で命を絶つ。本当に後を絶たない。何て切なくやるせないことだ。そして常にそうだが、友に教師に学校に原因がある。「死を選ぶ弱い子」「親の育て方」が原因ではない。何かに突き動かされ、解決を求めて。いや、誤解を恐れずに言えば、自分である世へ持っていこうとする“強者”の論理が見え隠れするように感じる。自分だけの世界で抱える、自己責任と言う名の魔物を。

昨年夏、講演会で真矢さんの父親、篠原宏明さんのお話を聞く機会に恵まれた。国の「いじめ防止対策推進法」9月施行を受けて神奈川新聞社が企画したものである。改めて父親である篠原さんの語られた言葉で「いじめを超える」時代の要請を感じた。弱い子だ、病気だ、障害だとの理解しない偏見で“いじめ・自死”を葬ろうとする学校と社会に、真正面から受け止める大人の力を見せる時なのだ。自死を持っていじめを解決しようとする、その心持から解放する。死を持ってあがなおうとする発想の呪縛から、こども若者を解き放つことだ。いじめる人が、いじめを傍観する人が、いじめを防止できない大人が、そして何も取り組めない学校や社会、僕を含めて問題なのだ。いじめを受ける“あなた”の「態度」や「性格」が問題ではない。自分を責めないでほしい。この社会の在り様、「友と仲よく」「学校へ行かなければ」等の社会圧で自己嫌悪感を抱いてしまう、現代人の課題なのだから。優しくすぎる平和的な“あなた”こそ大切にされる社会であって欲しいから、生きて欲しいのです。

予防するとは、建前と本音を子どもに教えることではない。「真面目すぎないで」「ウソも方便」「適当にやり過ぎして」という気休めはノウハウの一つではあるが、解決しない。真面目で素直であればこそ、悩み苦しき限界がくる。大

切なのは、大人こそが表裏のない正直な気持ちを交流でき、仲良く楽しんでい
ることをこども若者の前で表現できる生活をする事だ。また、言い争い批判
しケンカしても、とことん話し合えば理解し合い笑いあえる関係をつくれるこ
とを。しかし仲が悪く理解し合えないこともあり、時には互いに距離を開け離
れる冷却期間が必要なことを示してもよい。「みんな」意識や「健全」意識がど
れだけ真面目に悩むこども若者を排除してきたか、大人は自分の生きてきた道
を反省する必要がある。「顔で笑って心で泣いて」「笑顔で別れてペロッと舌を
出す」等の相反する心情を是としてはいけない。多様な在りのままの自分の考
えや気持ちを言うこども若者の育ちを進めることだ。学校や社会、大人は。

僕は今、「仲良くする」という結論を子どもに押し付けるのではなく、「自分を
語れる人間」になってほしいと思っている。正直、素直でいい。人の目やきも
ちを察して言葉を選ぶのではなく、自分の正直な気持ち、今心に描いている思
いを言葉にしてほしいと思っている。こども若者の喜びも悲しみも、辛さも歡
喜も認められる学校や社会を願っている。

それは何を言ってもいいのではない。分かりやすく言えば、人を語ること
ではなく、自分を語る事だ。これが現代、民主主義社会の人間関係の原則だ。
自分の自由と平等を大切にすることは、人の自由と平等を尊重することである。
それでは何も言えなくなる！ という声が聞こえてきそう。それは違う。具
体的言えば、以下のような発言をしていきたいと思う。

『私は……と思っている(考えている)。僕は……が悲しい(苦しい)。』

『僕は……さんが言う事は間違いだと思う。私は……さんと同じ意見だ。』

『私は……をしたいと思っている。僕は……がうまくできない。』

即ち、主語である自分を語る事である。他人(他国を含む)を馬鹿にしたりさ
げすむ事ではない。今流に言えばヘイトスピーチがいじめなのだ。いじめな
いとは、人を語る事ではなく自分を語る事なのだ。一人称の発言を積み重
ねることだ、『私は』『僕は』『自分は』『拙者は』『あたしは』と。

大人が偉そうにいじめの審判をする、それはおかしい。こどもと共に、子ど
もの声を、子どもと意見を交流しながら、一緒に判断することだ。国の「いじ
め防止対策推進法」には大人のエラそうな視点が見え隠れする。ぜひ各地域で
具体化される条例には、こどもと共にこの時代を切り開く具体を盛り込んでほ
しい。大人の経験は豊富だが、「いじめは人を成長させる」的な勝者の論理、必
要悪との隘路に陥る。学校や社会にはこどもと共に歩む覚悟が、大人の覚悟が
問われているのである。

2014年2月 講演会を前にして補論する 滝田衛

“いじめ”をなくす それは大人の使命

そこには、歴史から学べない大人社会がある。教育がその最たるものである。

1986年2月1日、岩手県の盛岡駅ビルのショッピングセンター「フェザン」のB1トイレ内で、東京中野の富士見中学2年の鹿川裕史君（13歳）が首を吊って自殺しているのが発見された。遺書が残されていた。

家の人へ そして友達へ

突然姿を消して申し訳ありません。(原因について)くわしい事については・・・

とか・・・とかにきけばわかると思う。(・・・は生徒名)

俺だってまだ死にたくない。

けどこのままじゃ「生きジゴク」になっちゃうよ。

ただ俺が死んだからって他のヤツが犠牲になったんじゃ、

いみないじゃないか。

だから、もう君達もバカな事をするのはやめてくれ、

最後のお願いだ。

昭和六十一年二月一日 鹿川裕史

滋賀県大津市の中学校で起こったいじめ、そして中学2年生の自殺。「いじめと自殺に因果関係がない」と教育委員会は言う。教育委員会は警察ではない。学校にいじめがあった。その被害者が自殺した。遺書はないが、22年前の鹿川裕史さんの訴え、遺書を教育関係者は決して忘れてはならない。学校・教師は、いじめ事実の究明と、いじめた生徒の謝罪と、学校の自己批判と改善を具体化して、自殺した少年の霊に額づくことをしなくてはならない。

僕は、不登校と社会的なひきこもりの子ども・若者に寄り添う中 NPO 事業の中で、ただ生きているだけでいいと強く願う日々を送っている。尊い命とは、何をなしたかではない。生きているだけで素晴らしいのだ。学校や社会がそういう場所であることが、尊い命を失ってきた過去から今に願う何よりの希望だ。命は紡ぐ、命が途切れてはいけない。過去の失った命から学び、この国の憲法が基調とする人権と平和、自由と平等を実現し追求するのが大人の使命だ。

様々な子どもたちとの出会いを10の小論にまとめた。鹿川君と同時代を学校で生きてきた教師として、大津市の中学2年生の冥福を未来へ願う。

2012年 秋 滝田衛

第1回 いじめと性格直し(1)

僕が教員だった30年以上前、1978年ごろ。対教師・生徒間暴力が学校に吹き荒れていた。生徒のスタイル、男子は長ラン・ボン短で髪は剃りを入れパンチパーマ。女子は地面を掃かんばかりの超ロングスカートに聖子(松田)ちゃんカット。喫煙とシンナーと暴力と授業妨害抜け出しに追われていた。もちろんこれは一部の生徒で、授業もしっかりやりクラスも行事も楽しくもあった。

放課後の大切な仕事、校内巡回。上司(変な言い方 学年主任や管理職を指す)の命令ではなく、極めて自発的であった。何故巡回するか? 面白いからだ。子どもの生の姿に出会える。必ず巡回する場、屋上踊り場(階段の)とトイレと秘密の校舎裏。トイレの個室から煙が上がっている。僕は隣の個室に入り、おもむろによじ登り、上から「おい、美味いか!」と声をかけると、「ヤベ!」。“逮捕”。ちなみにトイレ個室ドアの上の栈とタンクは灰皿代わり。

ある時、屋上踊り場で一人の女子生徒が5人に囲まれていた。土下座させられている。こんな時、「何やってる!(怒り)」と野暮な言い方はしない。その一言で子どもたちは演技に入る、示し合わせたように。僕は「遊んでるの?」と声をかける。二番手(?)女子が「この子さ性格悪りいんだ」と答える。「だから…」と僕が聞く。「性格を直してやってんだ、ヨ!」と女子が応える。一番手(真中か一步下がっている)は答えない。おもむろに彼女に「この子、どういう性格」と尋ねる。「約束破ったし、チャラチャラしてる」と返事。彼女が答えれば落着。僕は女子軍団に一目置かれた。「分かった、この子あずかるよ。僕が話すから」と、その子を連れだす。そして最後の一言、「お前らが人の性格直すの無理だ。僕も自分の性格なんて直せないから。これはいじめだ! 明日呼ぶからおいで」。基本はこれ。まずは状況把握、次にいじめられている子の救出、最後にいじめている側への注意と叱責。ちなみにチクったのではないので、被害者に報復はない。教師も一目置かれるのだ、彼女のグループに。

僕の視点

1. 校舎の巡回とは子どもとの触れ合いが基本
 - ・一人ぼっちの子や困っている子を見つけたら「こんにちは」「元気」と。
2. いじめや喧嘩を見つけた時の行動
 - ①攻撃や挑発をしない 指導支援は事情を聴いた後で行う
 - ②冷静な日常的な応対 笑顔と共感で接近。誰もが困っている。
 - ③危うそうな時、安全が損なわれる時は、臨機応変に対応する
 - 抱きかかえる 大声を出す 助けを呼ぶ 周囲の子どもに呼びかける

第2回 いじめと性格直し(2)

通学路でよく見かけるカバン持ち。いじめの場合、必ずカバンを持たせたい子を絞っている。ジャンケンでその子が勝たないように、「後出し」「そろってない」「もう一回」等、合理的理由はいらない。何が何でもターゲットの子に荷物を持たせようとジャンケンを続け、その子にカバンを持ち続けさせる。

ある日の学級会。各班が今日を振り返り反省を言う。ある班長が「〇〇さんは忘れ物が多く注意を聞かない。性格が悪いので学級会の議題に」と言った。他の班からも拍手が起こる。司会者が「では〇〇さんの性格を直す学級会に賛成の人は手を上げてください」と。賛成多数で可決され議長である学級委員の登壇。学級会で1人の性格を問いただす、形式民主主義の巧妙ないじめである。

教師はどうする？ 班長の役割は班員を守ること。班員を批判する班長は退場である。学級の子どもを守るのは担任である。守れない担任も退場なのだ。生徒はイエローカードだが、教師はレッドカードである。

一人の人間の性格を問題にしてはいけない。忘れ物が多い人の性格直しは、学級や教育の課題ではない。あえて言えば、忘れ物を通してどういう人間や関係を育てるのか、互いに学び合う子ども集団を育てることであると。

「何の教科の忘れ物が多い」「班や学級が取り組めることは」「忘れ物が少ない人の工夫は」等を学級会で話し合い、班や学級の取り組みに生かすことである。その結果、忘れ物しない取り組み、教材を学級に置ける工夫、忘れ物が多い人への援助、更に忘れ物に神経を使う教師側の指導改善などが進む。

先の学級会、どう解決するか。議長に問う。「あなたの性格が学級会の議題になったら？」と。たぶん「いやです」だ。万が一「私が悪いから仕方がない」と議長が答えたら、「もっといい方法は？」と問い直す。答えがなかったら教師が提案する。「忘れ物を少なくする学級の取り組みを話し合おう」と。

僕の視点

1. 学級を計画的につくる
 - ①朝の会 帰りの会 すべての子が参加できるプログラムを作る
 - ②学級会や班長会を定期的で開催する
 - ③班長は日常的な支援(理解と支え)が必要 1分班長会 昼休み班長会
 - ④最初は教師がやってみる 次は生徒の隣にいる 生徒に任せ寄り添う 0
2. 学級への思い 子どもへの支援の基本
 - ①ひとりひとりの生徒を多様な視点と行動で見守る
 - ②担任は得意な手法で向き合う 文化・レクレーション(歌・スポーツ)等
 - ③理念や思想より分かりやすい言葉で(仲良く 楽しく 学び合う)

第3回 いじめと性格直し(3)

中学3年のクラスであったこと。A子が嫌われている。机と机の距離が微妙にあいている。A子の机はよけて通る子が多い。僕は放課後、彼女に声をかけた。泣いて訴え、理由は分からないと言う。周囲の子に聞くと「口が悪い」「態度がでかい」「汚い(?)」と言う。再度彼女に聞いた。小さい時から体が大きかった、色が白かった、遊んでもらえなかった。更にお祖父さんが外国人、いわゆるクォーターで肌が白い。A子の孤独と劣等感(差別被害)を感じた。

いじめられているA子の立場に立つ。これがクラスづくりだ。「教師は中立平等でなければ！」なんて戯言をいう教員は逃げている。もしくは自己過信派だ。

学級の分析をする。いじめの中心派、取り囲み派、無関心もしくは独立派。この分析は生徒の中にいてこそ可能となる。そして学級委員や班長会を組織する。こういう学級会が子どもを育てるし、教師も鍛えられる。

学級会を再現しよう。学級委員と班長会長がいじめ問題を告発し改善策を提案する。改善策は、①いじめない ②性格直しをしない ③言いたいことは帰りの会で言う ④助け合う だ。班会議を行う。そして「Aさんは言葉使いが悪い」「整理整頓ができない、忘れ物が多い」「注意しても嫌な顔をする」「もっと性格を直し仲良くして欲しい」「いじめられてもしょうがない」、次々と意見が出る。提案者のリーダーもタジタジ。事前の作戦会議は「何が何でもA子を守る」だ。リーダーが発言する。「僕も言葉遣いが悪い」「私も忘れ物をよくする」「私なんかすぐ不機嫌になって迷惑をかけている」と。

A子をいじめている班長のB男が「俺も性格悪いと言われる。でも直せない」と言った。この一言が会議を変えた。「今発言したB男が一番いじめています」と取り囲み派C子が発言した。沈黙となった。そこで教師はA子に発言を促す。「私をいじめないでください」とA子は一言いう。リーダーたちはA子に拍手した。満場一致で改善策は可決。いじめのB男が発言したいという。「俺が悪かった。小学校の時に俺もいじめられていた。ゴメン」と。

学級会でのA子の発言は事前に了解しておいた。終了後A子は笑顔を返した。

僕の視点

1. 学級会、話し合いは何より大切
 - ①学級の総意(原案・討議・結論)としての学級会
 - ②原案を学級委員会や班長会で事前に準備する
 - ③緊急の学級会は、教師の支援力(判断力や発言力)が必要
2. 学級の生徒の理解
 - ①生徒の行動や思いを理解しておく 教師の観察力(個人ノート等)
 - ②学級の全体の理解 教師の分析力と現状(アンケート・感想文等)

第4回 いじめと不登校(1)

学校へ行けない、学校へ行かない不登校。教師には“手ごわい子ども”だ。教師は「(私が)嫌われている」「いじめがあったのか」と悩む。「本人の問題」「親の責任」と回避する教師もいる。多くは、距離を置き忘れてしまう教師だ。

不登校に原因はある。大きくは環境だ、学級・学校環境。学校は明治時代、軍隊を手本にした。日本の軍隊はいじめを公認し、上官・年長者・経験者優位、絶対服従を育てた。民主主義の現代の学校でも受け継がれ、個人を基調とした学校は成立しない、学校ありきだ。集団化できない個人を矯正し、性格直しが横行し、いじめが温存される。現在でも子どもの教育を実現できていない。できているのなら不登校はないはずだ。教育制度が個人を保証していない。

A 男は騒がしいのが嫌いだ。前の男子がうるさい。その子を注意する隣の女子の音が苦手だ。更に、叱る先生が怖い。A 男は大人しく優しい子だ。「もっと男らしく」「友達つくれ」と生徒に、教師に、親に言われ、学校を避けなくなった。数日休むと、仲良しの子が誘いに来た。うれしかった。その子が「男らしくいこうぜ」と。僕は男らしくない？ と不登校を決めた。

B 女はいつもニコニコしていた。笑顔が素敵だと言われていた。中学生になるとニコニコしている自分を変かたと、戸惑うようになった。勉強は出来た。小学校からライバル心の高い女子が「作り笑顔ってブス」とつぶやいた。その子が同じ塾へ入ってきて、他校の生徒にも「作り笑顔ってブス」と言った。ブスの一言が気になって気になって、自分を傷つけた。塾をやめ不登校となった。

C 男はサッカーが好きだった。技術も高く中学では3年生と同じレベルだった。活発で友達も多く優しい子だった。C 男は1年組から外れて、2・3年生と一緒に練習した。1年生がグループ化して、下校時も練習試合往復路もC 男と別行動をとった。状況を理解するようになると、1年生集団の後を一人で歩いていた。情けなくなった。サッカーがつまらなく、学校へ行くのをやめた。

3人は自滅？ こんなことがあっていいのか。精神的に強くないから、大人しすぎるから、不登校となる。子どもを中心に置いていない学校の現実。

僕の視点

1. 生徒の思いと関係、教師との距離を理解する
 - ①教師の思いや考えを反省的に振り返る、教師に合わせる生徒の存在
 - ②生徒の二面性 笑顔や泣き顔 生徒間の中で理解する
 - ③トラブルは表層 困っている生徒や悩んでいる生徒がそこにいる
2. 生徒の感受性を体感する
 - ・肯定的に生徒の考えや行動を受け止め評価する
 - ・困った子がいるのではない。理解していない教師がいる

第5回 いじめと不登校(2)

いじめる側が不登校になる場合がある。よく言われる、いじめた側がいじめられるということだ。目には目を、歯には歯を？ 空しく悲しい事実だ。

A 男はツッパリの番長。代々受け継がれてきた立場を譲り受けた。かのように見えたが、違っていた。上級生に取り入るのは上手かったが、同級生の面倒見が悪かった。中学3年になった5月、同級生とタイマン(1対1の喧嘩 取り巻きが見ている中で)をはった。グループの男子が「俺は喧嘩が強い。〇〇を一発で倒してやる」とA男が言っていると吹聴し裏切った。もともと気の小さいA男、タイマンに臨み、10数人の前で殴られ土下座した。

態度は急変、遅刻してくる、窓から教室に入る、放課後は一目散で帰る。もちろんトイレはいかない。この様子に気が付くまで1週間かかった。家庭訪問して詳細が分かった。A男を支えていたクラス男子の家庭訪問をして更にいじめの実態が分かった。執拗に暴力が繰り返され、無抵抗のA男が10数人に殴られていた。A男は「俺が悪いから仕方ない」と言うが自信喪失状態。親はグループから抜けてよかったと。学校では、暴力への謝罪とグループの解体に向け、学年教師が取り組んだ。

A男は不登校状態。僕は学級会でお願いした。「A男のやってきたことは認めないが、反省をしている。不登校のA男を支えてほしい」と。A男を非難し吐き捨てるような意見が出た後、クラスは妙に団結した。こういう時は救いの手が上がる。ツッパリグループ中心男子と仲の良いB子が、「私がグループに言ってやるよ。うちのクラスの子だから」と。気持ちだけは頂いて、決して個人で動かないように伝え、学級会は終了した。

その後、A男は1学期末7月まで、朝は窓から入室、帰りのHRなし帰宅、学級の活動なし、トイレは5人が同行、特別扱に徹した。クラスはいじめ防衛隊となった。9月体育祭からA男は応援団長で復活、文化祭もクラスの中心となって過ごしていった。「罪滅ぼしです」と自嘲気味のうつむきが微妙だった。

卒業後のA男、この事実からはなかなか解放されず、さまよい続けていた。

僕の視点

1. 支配的な言葉と行動の組み替え支援
 - ①生徒の個性と課題を理解し、多面的に支援する
 - ②人間関係の支配力を組み替える価値観、多様性を提示
2. 暴言や暴力の組み替え支援
 - ①威圧的行動をクールダウン、暴言と暴力を低下させ穏やかな行動へ
 - ②感情論をトーンダウン、怒りや不満をおき違いを理解し合う行動へ

第6回 いじめと不登校(3)

転勤した学校の3学年、不登校が多かった。クラス36人中、不登校が8人。何とも寂しい。背景に約30名のツッパリ軍団がいて、落ち着かない学校。

4月相談に来た父親は「息子の服装違反を認めて」、ある母親は「いじめをなくして」、更に「怠けている娘を叱って」と他の母親。学校に行けない苦情だ。何とかしたい。とにかく学校を出て地域を歩く、家庭訪問を始めた。

「どうして短ラン着たい?」「いじめられる理由は?」「学校はつまらない?」と生徒に聞くが答えない。当たり前、教師の信用は低い。そこで親と話す。家だから安心、学校の不満続出。「何もしてくれない」「生徒に負けている」「授業がつまらない」と。2時間ほどで話し方が変わってくる。「家の子も我がまま」「先生も優しすぎ」「学校も大変」と。親も困っている、と実感。その後も訪問を続けると生徒は話し出す。学校への“抗議”だ。反論したいがここは聞き役。

5月職員会議、指導方針の改革、「服装指導より学習権保障」を提示する。軍団のアジト(山小屋?)へ押しかけ、お土産にタバコとシンナーを持ちかえる。軍団の親に集まってもらい意見交換。不登校生徒には出前授業(勉強会)を始めた。

いじめ被害のA男の家で友人2人と勉強会、3人とも勉強ができる。すぐ終わってTVゲーム。「明日迎えに来るから」と友人。翌日校門で6人づれのA男と出会う。B子は一人親家庭。親が病気、心配で学校へ行けない。一番嫌なのは学校が騒々しいこと。5月、授業は落ち着いた。空き時間に家庭訪問。「さあ行くぞ!」っていう勢いで車で学校へ。少しずつ学校へ来るようになった。

軍団が問題視されるが、特殊学級(現支援級)生徒の良い遊び相手。ある意味優しい。軍団はズルい子、裏表がある子、教師に良い顔する子が嫌いだ。そういう生徒を見抜けない教師が許せず、軍団の“掟”で支配する。軍団の“掟”・暴力の一扫、どの子にも分け隔てなく向き合える学校を確立することが急務。

10月の授業中、軍団と生徒会役員C男がいない。屋上でいじめ現場発見、軍団10数人が取り巻く。理由はC男が女子の悪口を言ったと。軍団解体のチャンス。2週間後C男に番長が謝罪し軍団は拡散し始めた。進路もあり、これまでの地道な教師の多様な取り組みが実を結び、生徒への信頼が回復した。

僕の視点

1. すべての生徒の学習権を保障する支援
 - ①生徒の思春期状況、家庭状況等を理解する
 - ②学習権の保障を願い、生活力・学力にあった支援の具体化
 - ③生徒の個性、クラスの間人間関係を理解し個別支援へ
2. 生徒の状況は生徒に聞く 生徒の声に耳を傾ける聞き上手に

第7回 いじめと部活動、携帯メールのワナ

10年前、久しぶりに現場へ管理職で戻る、いじめは巧妙になっていた。携帯電話、メール、PCホームページ(HP)と新手の登場(最近はブログ、ツイッター、ミクシーやラインと多様)。携帯番号やメールアドレスの数が生徒のステイタス、安心感の証の時代。「友達400人」とアドレスを自慢する中2女子もいた。

午後6時過ぎの職員室、3年生徒指導教員と部活顧問が報告に来た。3年A男の母親から「家の子がいじめられている」と電話があったと。A男は副部長。真面目でクラスでもリーダー格。3人の教員が本人と保護者に会い、事実関係を理解するため、家庭訪問へ出かけた。

母親の話では、A男は家に帰るなり「部活動を辞める。学校も行かない」と母親に言って自室に閉じこもった、母親が問いただすが答えない。そこで学校へ電話したといういきさつ。部活を辞めたい訴えだったので、部活顧問がA男の部屋に行き、2人の教員は母親に更に事情を聴き今後の対応について話し合った。顧問は「部活動は辞めさせない」との姿勢で臨んだが、A男は話さない。

そこで顧問は女子部長に電話した。部活動メールや部員HPに沢山の書き込みがあると伝えてきた。「A男はキモイ」「部活内、恋愛禁止」「副部長失格」「Bちゃん泣いている」「A男追放」等、プリントするとA4紙24枚になった。ようやくA男は話し出した。部活練習が始まる前に、A男がB子に告白。それを見ていたもう一人の副部長C子が面白半分と嫌がらせで仲間5人に報告。すぐに「キモイ」「臭い」「スケベ」等の声が響き、メールも発信された。

告白した副部長A男への制裁と暴言、いじめだ。緊張感の高い集団主義の文化部、男子が少なく女子の存在観が高い。裏ルールによる集団の攻撃が個人を縛り付けた。A男は個人制裁を合法化させるターゲットとなった。告白を微笑ましく賞賛し、副部長職を尊重してくれれば何事も起らなかったが。

メール等のいじめは加害者意識を失う。ただでさえ、いじめに罪悪感はない。このいじめは早い対応だったのと、単一部活内の出来事で終わったので、翌日には解決した。A男は部活を辞めることもなく、部員にも良い反省で終わった。

僕の視点

1. メールは自意識を失い醜い本性を現す
 - ①便利なものほど、凶器となり人権をむしばむ
 - ②匿名性のコミュニケーションは無責任となる
 - ③メディアリテラシー 個人情報と人権保護
2. 早期の対応 事実理解で人権保護を最優先
 - ①困っているのは生徒 すぐに支援行動
 - ②人権保障 人権侵害への介入と人権回復

第8回 不登校を覚悟するいじめ

さて小論のテーマ、「ユウキだし、学校やすも」を説明しよう。中学1年生A男が不登校となった。最初は「お腹が痛い」と言って休みがち、ある日からプツンと行かなくなった。母親は「行きなさい」叱責、布団をはがし着替えさせ、立てこもるトイレのドアを破壊する行動へ。A男は母は好きだが従わなかった。学校へ行かない理由を言わない、親にも先生にも。母親は学校へ何度も通ったが、進展は何もなかった。A男は学校以外の病院や相談所へ母親と出かけたが、やっぱり何も語らない。母親は分からなくなり、悲痛にくれた。

2か月が過ぎ、母親は力が抜け始めた。医者「ゆっくり休ませてください」のアドバイスを受け止め、家で自由にさせた。「学校行かなくていいよ」とA男に話すと、怪訝な顔をしていたが、数日で笑顔になり元気が出てきた。

半年が過ぎるとA男は外出した。母親も「このままで？」と疑問を抱いた。事前に集めた情報をA男に話し、フリースペースの見学へ。正直、A男は嫌な気持ち、不登校のレッテルを張られることに。でも、家にも母親を困らせると思い、決心して通い始めた。最初の一週間は黙ったまま、次の一週間は少し早く行って他の人たちを観察した。一か月が過ぎると緊張が取れ、気を使わず自由に過ごせるようになった。何とスタッフに学校でいじめられた話を始めた。もう不登校は気にならなくなったが、通う道中の人の視線に気疲れした。

8か月後、2年生となり学校の話は大丈夫となった。担任も変わり、家庭訪問を受け入れた。会ってみると学校へ来いとは言われなかった。逆にゲームの話や雑談、ゲームで遊び楽しい担任だった。週1回の訪問を待つようになった。2か月もすると心も通うようになった。そんな折、担任が「A男は優しいな。不登校はもったいないよ」と言い、「勇気出して学校へおいで」と言って帰って行った。前半の言葉はうれしかったが、後半の一言に絶望した。

翌日、A男はフリースペースのスタッフに昨日の話をして、こう言い放った。「俺は勇気をだして学校を休んでいる。学校は勇気を出していくところではない。あの教師は分かっている。学校は絶対に行かない」と担任を拒否した。

僕の視点

1. 「勇気をだして学校へ」発言は人権の否定
 - ①生徒を「勇気がない」と決めつけている
 - ②「勇気」とは我慢ではない 「自分を犠牲にしてでも行動できる価値」
2. 現代社会で学校教育を拒否する、不登校の理解
 - ①義務教育の誤解 子どもは教育を受ける権利 親は受けさせる義務
 - ②高校教育は必須 この制度を否定する不登校は自己犠牲をとまなう

第9回 いじめを否定しながらいじめてしまう子ども

不登校の子どもたちが集まるフリースペースは居心地いい。通う決意をするのは大変だ。学校へ行かない“挫折感”と教育の保障をすてる、“未来の喪失感”が迫り、異質な“不登校”を認めなければいけないからだ。

でも、一度フリースペースに足を運んだら、はまってしまう。何故なら、時間割もなく、勉強や遊びを強制されない。自由に過ごしていいからだ。最初はその自由に戸惑うが、なれてくると遊び雑談を始める。

高度成長と学校依存の渦中にいた僕（1951年生まれ 25歳から教員）はこの自由を理解することが難しかった。フリースペースを作った20年前、「これでいいのか」と自問した。親たちも同じ。「何もしないんですか？」「子どもに任せていいの？」と問いかける。しかし結論は向こうからやって来た。子どもたちの元気でくったくの笑顔が回答。憂うつで寡黙な姿の子どもが、笑顔で無邪気に。家でも同じような姿になり、親たちの疑問も消える。

フリースペースには様々講座がある。参加は自由。しかし、少しするとフリースペースに子どもはルールを求める。いつの間にか「みんなやろうよ」との仕組みを強制する。「やらない子はおかしい」「スタッフが強く言って欲しい」となってしまう。自分の過去を忘れたかのように、親や社会そして学校を背負う自分が復活する。「あの子わがまま」「空気を読めよ」と、こそこそ話やメールのやり取りで、悪口を言うようになる。結論は、「勝手な子」「性格が悪い」、そして無視！ いじめ！と排除が始まる。ほとんどの子が学校でいじめを受け不登校を経験済みだが反省は生きない？ 何をするかを自分で決めることは本当に難しい。これが本当の自分づくり、自分と仲間の関係を改めて問うという。

ここに不登校の子どもたちの発生の原因が見え隠れする。学校教育が求める協調性や集団性を引き受けられず我慢してきた自分、結果いじめられ不登校となり学校へ行かなくなる。人生の“失敗”と自分を傷つける。極論すれば、地球の中心に自分を置けない。自分は生きる価値のない人間と実感する。

私たちフリースペースのスタッフはここに意義を感じる。もちろん叱ることも大声を上げることもある。しかし「あなたは素晴らしい」「生きているだけでいい」「自分を失い人に合わせてはいけない」「自分を好きになる」など等と寄り添う。子どもは変化し自分づくり、このままの自分でいいと確信する。

僕の視点

1. 思春期の自分づくり 苦労して自分で自分を手に入れる
 - ①親のモデルを基本に、さまざまな大人と出会い自分づくりを始める
 - ②友人や集団との関係、友好と拒絶、親愛と憎悪、を自己実現のモデルに
 - ③粘り強い、誠実な大人の関わりが子どもたちの未来を実現する

第10回いじめをなくす 学校を豊かにする

「いじめをなくせるか？」は必要悪としての“いじめ”を肯定している論理に聞こえる。究極「戦争はなくなるか？」につながる。“話し合い”より“暴力”解決、これが戦争。いじめも同じ論理。いじめは集団を巻き込み、暴言と暴力で一人の子どもを恐怖と孤独に追い込む、戦争である。

いじめは首謀者のストレスと傲慢、差別と偏見を根拠に集団的に一方的に始まる。「性格が悪い」「汚い」等のラベリング。言われなき差別は集団心理と権力的支配欲をかき立て、優越と快感を手に入れさせてしまう。

いじめを受ける側も「性格が悪いから」と自らを追い込み孤立、「笑われ」「嫌われ」「暴力」を受けることで自信と信頼を失い、自分を嫌ってしまう。

多くの子どもは見て見ぬフリ、「いじめられる子が悪い」「いじめる側にいる訳ではない」との理由で自己防衛、いじめに加わる。そこに差別観が生まれる。子どもは性格や身体のコМПレックスと仲間の視線や声と態度を強く感じる。自分の差別観を強化し“醜い”態度の生徒を排除する。この差別感が、いじめられる恐怖といじめが巡回する誤解を肉体化してしまう。

日本の大人は、封建社会の身分制度や戦前の全体主義の遺制に蝕まれている。個人の尊重より、集団主義や協調を是としている。教育制度も同様である。国の制度は民主主義だが、学校では「横並び」「出る杭は打たれる」。

思春期の子どもは大人の悪しき影響を受けやすい。誤解を恐れずに言えば、民主主義・憲法が学校やクラスに生きていない。法的な約束を前提とする社会ではなく、前近代的な差別観と偏見が学校に充満している。いじめの温床。

「個人として尊重される(13条)」→**身体や人格が学校で干渉され否定される**

「法の下に平等(14条)」→**クラスの中の一人、個人は否定される**

「思想及び良心の自由はを侵してはならない(19条)」→**自己主張を否定する**

「ひとしく教育を受ける権利(26条)」→**学校に行けない不登校を放置**

この4つの憲法すら、学校で実現されていない。いじめという言葉が独り歩きし、怪物のように学校を徘徊している。いじめが問題なのではない。憲法を実現できない学校が、いじめと不登校を生みだしている。

僕の視点

1. 個性的な子を大切にできる 個人を尊重できる教育環境
2. 教師が個性を示す 一人称で発信行動する学校を
3. 子どもの最善がベース 個人尊重の学級と授業
 - ①問題の子がいるのではない 教育の課題がある 解決を求めている
 - ②子どもに寄り添い、諦めない 多様な支援で子どもの学びを保障

おわりに

この小冊子の趣旨は「いじめを生み出す学校教育の問題点と改善を巡る小論」。子どもたちの姿に学んだ僕が、歩んできた学校やフリースペースでの様々ないじめと不登校の事実を整理したものだ。何よりも『ユウキ(を)だし 学校(を)やすも(う)』と提起したい。《笑顔で生きるみらいへ》を子どもたちに願うからだ。

義務教育9年、高校3年、計12年。その先に膨大な人生が待っている。いつの間にか、12年間の教育を肥大化させる時代になった。残念だ。子どもには自分を成長させる力がある。笑顔で長い人生を生きる子どもに思いを馳せたい。

「一人の命が大事」と言いながら、横並びの協調性と集団化で「一人の子どもの命を奪う」学校がある。子どもが泣いている。学校で起こっていることを、家庭や親の責任とする学校がある。親の無念さが聞こえる。日本国憲法が具現化できず、人権が保障されていない学校現場がある。差別と偏見そして誤解の楼閣、それが学校だ。この呪縛から学校を解き放つ、これがいじめをなくす。

憲法に論及したが、誤解する教師に敢えて伝えたい。憲法条文を暗記することではない。憲法の条文をクラスで読み上げ、生徒に唱和させることではない。

教師が民主的人格を身に着け、憲法に基づく教育実践をする。子どもの最善を実現する。教育実践を仲間と検証し、先輩教師の財産に習い、成功事例を教育実践に組み込め。何よりも子どもから学ぶ。学校と教師の実践が憲法に合致しているかを問い続け、常に実践し反省的教師(佐藤学氏:東京大学)であり続ける。

僕の視点

1. 教師の言動が、憲法の教育権・人権尊重に合致している
2. 子どもの言動が、憲法の自由と平等に基づいている
3. 学校のルールや教師の取り決めが、子どもの人権保障をしている
4. 子どもの最善を、授業や学級や行事で実現している
5. 職員会議の公開性、子どもや親そして地域の参加を実現している

いじめを自死で告発した1980年代。不登校の子どもが学校を問うた1990年代。未だいじめも不登校も解決しない。現在高校進学率97%を越え、卒業資格はライフライン。その先に高校不登校中退、専門学校・大学・大学院不登校中退、社会的ひきこもり70万人(親和性150万人 内閣府2010年)、非正規労働者1,721万人(2009年厚労省)社会が存在する。子ども若者は社会参加が閉ざされ人生をあきらめる。フリースクール・サポート校・定時制・通信制・高校卒業程度認定試験が救済するが、学校の支援は補助的に過ぎない。この小論を読んでも「頑張らないから」と子どもの自己責任をつぶやく大人の声が聞こえる、残念だ。でも、子どもは自分の力を信じ健気に生きている。 完



2014年1月13日(火)応援団会議より in Yokosuka CSS

七里ヶ丘こども若者支援研究所
主宰 滝田 衛

mail qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp

Tel 090 7212 4055

住所 鎌倉市七里ガ浜東 2-31-12
